

## 吉蔵の成仏不成仏觀（五）

末 光 愛 正

### 序

既に「吉蔵の成仏不成仏觀」<sup>(1)</sup>「吉蔵の成仏不成仏觀（二）」<sup>(2)</sup>「吉蔵の成仏不成仏觀（三）」<sup>(3)</sup>「吉蔵の成仏不成仏觀（四）」<sup>(4)</sup>と題して、吉蔵（五四九―六二三）の成仏と不成仏觀に関して論述してきた。その内容は、①五千の増上慢と決定の増上慢は不成仏であるが、②これ以外の常不輕菩薩所対の増上慢を含む他の二乗は全ていずれかは成仏する事、③成仏する為には、一切衆生悉有仏性に相應する正因仏性の上に、更に發菩提心の緣因仏性を満す事。④五千の増上慢等が成仏できないのは、これらの二乗にも成仏可能な正因仏性があるにもかかわらず、法華教を信ぜず、緣因仏性である菩提心を發しようとしなからである事。⑤吉蔵が法相宗の説以前に、不成仏説を主張するのは、「從<sub>二</sub>実相一法<sub>一</sub>、出<sub>二</sub>一切教<sub>一</sub>」と云う体より出生する用を全て肯定する為である。即ち成仏説も不成

仏説も一切教の中に含まれ、吉蔵のこの論理からは、相い矛盾する説をも包容し、肯定する為、不成仏説も主張しなければならぬのである。

今回はこれらの内容に続く、出生・收入と三種法輪説、方便の問題等に関して論じてみたい。

### 一、出生と收入

先の論文にて

一には実相の体、限量すべからず。謂く体無量なり。二には実相の一法より一切の教を出だす。謂く用無量なり。（法華義疏、卷第二、序品、大正蔵三四卷、四六七頁下）

と、「実相の一法より一切の教を出だす」と云う「出生」の事について触れた。そもそもこの「出生」や「收入」の事は、『勝鬘經』と深い関係が存する。『法華玄論』中、「問、法華勝鬘俱明<sub>二</sub>一乘<sub>一</sub>。一乗何異。」と、法華と勝鬘經の一乗の

相違点を論じている所がある。その中に、

出生者、猶如大地出四種寶藏、正法出生五乘也。收入者、正法出五乘、五乘歸正法。此之出入舒卷皆是平道因緣法門、無所斥奪。(卷第四、大正藏三四卷、三九三頁上)

と、勝鬘經の「攝受章第四」の文を引用している。「出生」とは、正法より五乗が出ること、「收入」とは、逆に出生した五乗がもとの正法に帰することである。吉蔵の『勝鬘寶窟』の「攝受章」の注釈中には、

收入とは、用を摂して体に帰す。所謂、一切の願行を摂して同じく実相の正法に入れ、言忘慮絶なり。法華に、究竟涅槃は常に寂滅の相なり、經に空に歸すと云うが如し。出生とは、体より用を起す。一の正法より一切五乗の因果を出生す。(卷中之本、大正藏三七卷、二九頁中)

と、正法とは実相の体であり、五乗が実相の用である。この一の体より、一切の五乗の用が出生し、又五乗の用が一の体に收入される体用論である。又

攝受正法が、八万の法藏、恒沙の法門を出生することを明す。

(前同、大正藏三七卷、二七頁下)

とあるごとく、正法の体は、五乗のみならず、八万の法藏、恒沙の法門をも出生する。即ち「実相の一法より一切の教を出だす」ことであり、それが故に逆にまた、一切の教も実相の一法に收入されることになる。

吉蔵の成仏不成仏觀(五)(末光)

## 二 三種法輪説と出生收入

所でこの体用の出生と收入の考えは、吉蔵の三種法輪説にも当然、当てはまる。

摂末歸本は、謂く用を摂めて体に帰するなり。從本起末は、謂く体より用を起すなり。(法華義疏、卷第四、大正藏三四卷、五〇六頁上)

即ち、摂末歸本法輪は、三乗の用を摂めて実相の一乗の体に帰する收入の義である。又從本起末(枝末)法輪は、実相の一乗の体より三乗方便の用を起す出生の義である。或は、

二欲明法華之前從体起用從一生三、法華已去攝用歸体會三同也。要前明從体起用、後方得攝用歸体。(法華統略、卷一統藏一編第四三套二冊十四丁C)

と、法華の前の教えは、一乗より三乗を出生した方便の用の働きを説く。法華以後は、会三同(歸)一と云う三乗の用を摂して、もとの実相の一乗の体に帰する收入の義である。

まず一の体より三乗の用が出生する事に関して、吉蔵は次の様に述べている。

その原を窮めとは、三乗の原を窮むるなり。原は誰だ一あるのみなるも、昔權に三(乗)ありと説く。異に封(執)するものは、未だ其の本を尋ねざるが故に、三有りと謂うのみ。若し考えて之を窮むれば、唯だ一の原なり。故に無量義に云く、一法より無量の義を生ず。其の一法とは即ち無相なり。是の如く相

と不相となきを名づけて実相となすと。法華に云く、一仏乘に於て分別して三を説くと。涅槃に云く、是の一味の藥、その流るる処に随つて六種の味あり、及至亦、三乗の味ありと。皆是れ一の原を明すなり。（十二門論序疏、大正藏四二卷、一七一頁下）

即ちこれは、僧叡の「十二門論序」中の「欲<sub>レ</sub>以窮<sub>レ</sub>其源<sub>レ</sub>」<sup>(6)</sup>「盡<sub>レ</sub>其理<sub>レ</sub>也」の文の註釈である。吉蔵は「その原を窮め」とは、三乗の原を窮むる事と解釈する。即ち三乗を窮めその本を尋ねて行くと、それはただ一つの根源より出生すると解釈する。その経証として先に論じた『無量義經』<sup>(7)</sup>、或は『涅槃經』<sup>(8)</sup>の文を引用する。この中に『法華經』の

於一仏乘分別說三。（方便品、卷第一、大正藏九卷、七頁中、又譬喻品、卷第二、大正藏九卷、十三頁下、又化城喻品、卷第三、大正藏九卷、二六頁上）

の文も引用される。「分別說三」の三乗の原を窮めて行くと、「於一仏乘」の一乗が根源になると云う経証である。三種法輪説でも枝末法輪が説かれるのは、

根本法輪者、謂仏初成道華嚴之會、純為菩薩開一因一果法門。謂根本之教也。但薄福鈍根之流、不堪聞一因一果故、於一仏乘分別說三。謂枝末之教也。（法華遊意、大正藏三四卷、六三四頁下）

と、「於一仏乘分別說三」のこの文が経証として引用される。

即ち、未分の一乗の実相の体より、三乗の方便の用が出生した。或は華嚴の根本の教より、三乗の枝末の教が出生したことで、三乗は中道一乗の源より出生したと主張するのである。或は、

又將に多を撰して一に歸することを明さんとす。必ず須らく前に一より多を生ずることを弁ずべし。一より多を生ずるを以ての故に、方に多を撰して一に歸することを得。法華亦爾り。故に將に一乗を説かんとして、前に無量義經を説く。無量義經は一より多を生ず。法華は則ち多を撰して一に歸す。又法華自ら二義を具す。一仏乘に於て分別して三と説くとは、謂く、出生の義なり。我れ是の方便を設けて仏慧に入ることを得しむとは、謂く、收入の義なり。（宝窟、卷中之本、大正藏三七卷、四二頁中）

と、「於一仏乘分別說三」が出生を意味し、「方便品」の「我設是方便、令得入仏慧」<sup>(9)</sup>が收入を意味する文である。しかし法華は、多を撰して一に歸する收入の義、即ち撰末歸本法輪である。この收入の前提として「無量義者、從一法生。其一法者、即無相也」と出生の義を説く所の『無量義經』が、先に説かれるのである。一より多を生ずると云う前提があつてこそ、多を撰して一に歸すと云う主張が出来るのである。『法華義疏』にも、

問う、今は法華を説く、何が故に前に無量義經を説くや。答

う、法華は一切の乗を会して同じく一乗に入る。今將に収入の義を明さんとするが故に、前に出生を弁ずるなり。一法より一切の法を生ずるを以ての故に、一切の法は一法に還歸す。所以に將に収入を弁ぜんとして前に出生を明す。是の故に前に出生を説くを収入の序とするなり。問う、何が故に將に収入を明さんとする前に出生を説くや。答う、四十余年三教に封執するに由って、忽にして一に歸することを聞かば、心即ち驚疑せん。是の故に先づ、一切の諸教は本一より生ず、寧ぞ一に歸せざらんやと明す。(卷第二、大正藏三四卷、四六八頁上)

と、法華の収入の義を説く為には、出生を説く必要がある。吉藏は無量義經に対し、「今五義を以て證するに、此の無量義經は是れ法華の前の無量義經なり」と、法華經の序と考える。一法より一切の教が出生すると云う法華の序の無量義經が説かれる為、法華にて会三歸一の収入の還歸の義が成り立つ。又「於一仏乗分別説三」と云うのは、

若し一を開いて三となすと言わば、即ち是れ方便の三なり。物信受せじ。故に此の説を隠し、而も覆相して三を示す。(法華

義疏、卷第七、大正藏三四卷、五四九頁中)

と、方便の三乗である。方便の三乗であることを隠し、法華にてはじめて方便であることを明したのは、声聞に信じこませる為である。この為四十余年間、仏が説いた三乗の教えが真実であると、声聞は思い込んでいた。この声聞に対し、法

華にて三乗は方便であり、一乗に還歸するといっただけでは驚疑するだけである。この為、一切の諸教はもと一より生ずると云う前提を説き、収入の義の論理的納得をさせるのである。以上の事により、

又法華前從<sub>レ</sub>体起<sub>レ</sub>用。法華已去撰<sub>レ</sub>用歸<sub>レ</sub>体。又法華前明<sub>二</sub>根本支末<sub>一</sub>。法華已去弁<sub>二</sub>撰末歸本<sub>一</sub>。(法華統略、卷一、統藏一編第四三套一冊十七丁a)

と、三種法輪説は、根本枝末法輪が一法より一切の法を生ずる出生の面を、又撰末歸本法輪が一切の法は一法に還歸する収入の面にて解釈されるのである。

### 三、教の三乗と縁の三乗

所で三種法輪説が、体用、出生収入で解釈されるならば、吉藏は一切皆成仏説であり、不成仏説を認める訳がないと云う主張が生ずる。即ち「一切の諸教は本一より生ず、寧ぞ一に歸せざらんやと明す」<sup>(11)</sup>と吉藏が主張するかぎり、「於一仏乗、分別説三」の出生の三乗も、結局は全て会三歸一され、もとの一乗に収入される事になるはずである。この為四種声聞中の決定声聞や五千の増上慢も勿論分別説三の出生の三乗の中に含まれるし、又会三歸一の収入の中に含まれる。故に吉藏は一切皆成仏思想であり、五千の増上慢や決定声聞が不成仏と云う主張は、出生収入の論理から云って、ありえない

事である。もし吉蔵がその様に云うならば、それは自家撞着であると云う主張である。

吉蔵が三種法輪説を出生收入にて解釈するかぎり、基本的にはこの解釈のとおりである。この為、五千の増上慢も決定声聞も、吉蔵は一切皆成仏と考える。これが先の論文<sup>(12)</sup>中で述べた正因仏性に対する通記である。即ち、

問、常不輕既是菩薩、云何乃授<sub>レ</sub>仏記。答、菩薩不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>劫数成仏之記、得<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>通記。以<sub>一</sub>一切衆生皆有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>。又無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>余乘<sub>一</sub>唯<sub>二</sub>一仏乘<sub>一</sub>、然道理推<sub>レ</sub>之得<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>仏記。乃至凡夫知<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>一乗者、亦得<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>他記也。（法華玄論、卷第七、大正蔵三四卷、四二〇頁下）

と、「一切衆生皆有仏性」と一切衆生には悉有仏性の正因仏性がだれにも具わっている。だれにでも正因仏性があるからこそ、「無有余乗、唯一仏乗」と云う出生の余乗がもとの一仏乘に收入される。これは道理、論理の上の事で、仏や菩薩でなくとも凡夫でもこの道理が判れば他人に対して授記出来る通記である。常不輕菩薩は、増上慢声聞と云えども「正因則広、善惡等一切衆生皆有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>故<sup>(13)</sup>」と云う正因仏性が有る事に対して授記したのである。けっして「縁因但取<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>信解心<sub>一</sub>方乃得<sub>二</sub>仏記<sub>一</sub>故<sup>(14)</sup>」と云う信解心と云う縁因仏性があるから授記をしたのではない。常不輕菩薩所対の増上慢は、

値<sub>二</sub>常不輕菩薩<sub>一</sub>者、初謗後信、初謗故千劫墮<sub>二</sub>無間獄<sub>一</sub>後信故

得<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>菩薩位<sub>一</sub>。（法華玄論、卷第七、大正蔵三四卷、四二二頁上）

と、正因門授記したのにもかかわらず信じないが故に、千劫無間地獄に墮ちる。しかし最後には一仏乘を信じて縁因仏性の菩提心を発するから菩薩になれるのである。四種声聞中の退菩提心声聞と応化声聞は、正因仏性のみならず、收入の一仏乘を信じ菩提心を発するから問題はない。問題なのは四種声聞中の残りの決定声聞と増上慢声聞である。この声聞は「無有余乗唯一仏乗」と云う收入の一乗を信ぜず縁因仏性を発しない無発菩提心者である。この声聞でも成仏する事を示さなければ、会三帰一の收入の道理の正しさが判らない。そこでこの縁因仏性のない声聞中、常不輕菩薩所対の増上慢に對して正因門授記をし、千劫無間地獄に墮ちたものの最後には一仏乘に入る事を示し、会三帰一が空論でないことを更に実証するのである。この道理の通記さえも、五千の増上慢や決定声聞の縁は、受けないが故に不成仏となると吉蔵は、考えている様である。

所でこの問題を考える時には、「於一仏乘分別説三」の出生の三乗を説かなければならなかった経由から考える必要がある。最初根本法輪を説いたが、「但薄福鈍根之流、不堪<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>一因一果<sub>一</sub>故、於<sub>二</sub>一仏乘<sub>一</sub>分別説<sub>レ</sub>三<sup>(15)</sup>」と、出生の三乗を説かねばならなかったのは、薄福鈍根の流の為である。しか

もこの薄福鈍根の流は、

仏初出世時、已有三乘根性。(法華玄論、卷第六、大正藏三四卷、四一二頁下)

と、仏が初めて出世した時、すでに三乗の根性として存在していた。又

問、初成道時、有三根性、一乗化二乗機不得化、菩薩應得。何故言我寧不說法疾入於涅槃。答、此機前義耳。始終乃有三機當時無有大機。以大化不得故欲入滅。又但用一化三、進無得益之功、退有起謗之罪。故欲入滅、此機後義也。(前同、大正藏三四卷、四一三頁上)

と、一乗を以て教化しても二乗を教化出来ないのみならず、起謗の罪を生ずるので、仏は初成道後ただちに涅槃しようとした。或は、

問う、仏自ら三乗を説きたもうとせんや。請を待つて説きたもうや。答う、智度論に依るに云く、梵王初に説法を請ずるに、如来は仏法甚深にして衆生は鈍根なりと云つて、請に違して説きたまわず。次に梵王衆生に上中下の根ありと陳べ、重ねて法を説きたまふと請ず。仏其の重請を受くるが故に三乗を説きたまふと。(法華義疏、卷第四、大正藏三四卷、五〇九頁上)

と、仏如来は、仏法甚深であるに比べ、衆生はあまりにも鈍根で、とても一乗を理解出来ないと考え説法しなかった。しかし梵王が、衆生の上中下の根に合う様に教化される事の重

請により、三乗の教えを説いたと云う。この為に、

何の因縁の故に、道理は一あるのみなるに而も一と説かず、三乗あることなきに而も三と説きたもうや。豈無なるを而も有と言ひ有なるを而も無と言ひて、我を欺誑したもうに非ずやと。是の故に釈して云く、道理は一のみあつて三なしと雖も、但汝等五濁の障り深くして一を受くるに堪えざるが為に、是の故に諸仏方便して三と説きたもう。過は衆生に在りて咎諸仏に非ざるなりと。(法華義疏、卷第三、大正藏三四卷、四九七頁上)

或は、

是以先三後一過、在衆生非仏咎也。(法華玄論、卷第五、大正藏三四卷、四〇四頁中)

と、道理は一乗のみあつて三乗がないのにもかかわらず、衆生の五濁の障りがあまりにも深いので、理解出来る様に方便して三乗を説いたのである。この故に、分別説三の罪はただただ衆生のみにあつて、仏にはないと主張する。

以上の事から判る様に、仏出世以前から、三乗の縁が存在した。この三乗の縁を救済する為に、一法より三乗の教を出し、その三乗の教が一法に帰すると云う出生と收入の道理を示した。この出生と收入の教の道理に従う縁は成仏し、従わない縁は不成仏と云う事になる。三乗が教の上で会三帰一されたとしても、三乗の縁が全て会三帰一されるかは別問題であり、縁と教とは区別すべきものである。即ち、

問う、但一切の教一より生じ、是の故に一に帰すとならば、亦一切の衆生も一より生じ、以て一に帰するや。答う、彼の經に明す、一切の衆生は一道清淨を失す、故に種種の道を成ず。諸仏無縁の大悲をもって、衆生をして一道に帰せしめんと欲したもう。是の故に一道より無量の教を出すというのみ。問う、若し爾らば法華と何んが異なるや。答う、彼の經には直、衆生一道を失して種種の道を成ずと明し、亦直、諸仏一道を失する衆生の為の故に一道より一切の教を出だすと説きたもうことを明して、正しく縁と教と並に一道より生じと明せども、而も方に言つて、未だ縁と教と並に一に帰すとは明さざるなり。問う、縁と教と並に一道に帰せば、何者をか正意とするや。答う、縁を正となす。一道は本性清淨なれども、而も衆生虚妄にして一道を失するを以ての故に六道を成ず。今還つて一道を悟らしめんと欲するが故に、一法より一切の教を出すと言くのみ。若し衆生本一道を失すと明さずんば、一切の教は一法より出づと言くと雖も、終に一道に帰せしむること能わず。此の義は是れ法華の会三帰一の正意なり。（法華義疏、卷第二、大正蔵三四卷、四六八頁上）

と、一切の教が一より生じ、又一に帰するならば、一切の衆生も一より生じ、又一に帰するかと云う問である。衆生の縁も教もどちらも一道より生じ、又縁も教も並に一道に帰す。衆生の縁を一道に帰する為に、教の出生收入を説く、これが

法華の会三帰一の正意である。摂末帰本法輪にて四種声聞の全てを教としては收入するが、衆生の縁の全てが收入出来るかは異なる。吉蔵が摂末帰本法輪に対して、得失門と定義づけるのは、この点を踏まえての事と思われる。

一乗の眞実門は、謂く根本法輪なり。諸仏の出世は但一大事因縁を明さんが為にして、謂く一道清淨なれば、則ち根本法輪なり。但し衆生は薄福鈍根にして一道を受くるに堪えず。是の故に一仏乘に於て方便して三と説く。謂く枝末法輪なり。既にして一より三を起せば、還つて三に籍つて一に通ぜしめんと欲す。若し能く三は一に帰するが為なることを知らば、則ち是れ得にして失に非ず。如し其れ三を保して一を受けづんば、是れ失にして得に非ず。故に得失門は収末帰本法輪を明すなり。（法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四九四頁中）

即ち根本法輪は一乗眞実門であり、枝末法輪は三乘方便門であり、収（摂）末帰本法輪は得失門であると定義する。「若し能く三は一に帰するが為なることを知らば、則ち是れ得にして失に非ず」と、会三帰一の收入の義を受け入れるならば、摂末帰本法輪は得門となる。しかし「三を保して一を受けずんば、是れ失にして得に非ず」と、会三帰一を受け入れなければ、摂末帰本法輪は得益のない失門となる。摂末帰本法輪に対し失門の面を認めるのは、一切皆成仏の正因仏性の立場からは導き出されない。又「一切の諸教は本一より生

ず、寧ろ一に歸せざらん」と云う道理の教の立場からも云えない。これは衆生の縁を教の道理によって一道に實際につかせる事が出来るか出来ないかによるものである。四種声聞授記に関する次の文を再度引用し、摂末歸本法輪が得失門である意味を確認したい。

二種の声聞には仏授記を与う。謂く応化の声聞と及び菩提心を退して還つて菩提心を發せる者となり。決定と増上慢との二人は、根未だ熟せざるが故に仏授記を与えず。然して決定の声聞は小乗を保執し、増上慢の人は自ら究竟と謂いて作仏を信ぜず。即ち記を与うるに堪えず。亦破執及び会歸の義に堪えず。而も此の經が一切の二乗を会して以て成仏せしむとは、蓋し是れ應に悟るべきの人に対するが故に、此の經を説いて破及び会の義を明すのみ。増上慢も亦爾なり。五千の徒の如きは破と会とを聞くに堪えず。根未熟なるを以ての故なり。常不輕所對の増上慢は其の根已に熟して破と会とを聞くに堪う。故に為に一乗を説くなり。(法華義疏、卷第八、大正藏三四卷、五六六頁上)

即ち、摂末歸本法輪にて会三歸一される得門の声聞は、応化の声聞と退菩提心の声聞と常不輕所對の増上慢声聞である。摂末歸本法輪にても三乗を保つて一乗を受けつけない失門の声聞は、決定の声聞と五千の増上慢である。<sup>(16)</sup>或は、

今明す所は、二乗一乗に入るあり、一乗に入らざるあり。人天

も亦爾り。法華論に云うが如し。人天の善根及び決定の声聞は、並に成仏せず。故に要す須らく菩提心を發して方に成仏を得べし。而して今、五乗衆生並に皆成ずと言ふは、人天二乗、遠く菩提心の縁と爲るを取り、人天二乗に籍て仏菩薩に値い菩提心を發し、然して後に方に一乗に入つて作仏す。又五乗作仏と言ふは、五乗の人、一乗より出するを以て、是の故に五乗同じく一乗に歸す。又五乗同じく仏性あり、故に同じく一乗に入る。法華論に説くが如し、二乗の以て授記することは三乗の人、法身平等なるを以ての故に、常不輕、惡人に記を授くることは、亦衆生に仏性あることを示すが故なり。同じく仏性ありと雖も、要す須らく菩提心を發して方に作仏を得べし。發せざるものは則ち作仏を得ず。(寶窟、卷中之本、大正藏三七卷、四二頁上)

と、三乗の場合と同じように、五乗作仏と云うのは、一乗より五乗が出生したから、もとの一乗に五乗が收入するのである。それは五乗にも仏性、即ち正因仏性が誰にでもあるからである。常不輕菩薩が惡人にも授記するのは、一切衆生に正因仏性があることを示す為である。しかもこの正因門授記が、終局的には縁因仏性の發菩提心につながるからであり、菩提心を發しないものは成仏出来ない。人天乗の挙手低頭の善等も、發菩提心の遠縁となり、延いては縁因仏性の菩提心につながるからこそ、人天乗も成仏出来るのである。<sup>(17)</sup>



以上のごとく、中道一乗より出生した三乗には、教の三乗と縁の三乗がある。教の三乗は道理を説くものであるから、一乗より出生した三乗は、全てもとの一乗に收入される。これは一切衆生悉有仏性の正因仏性が全ての衆生にある面であり、五千の増上慢も決定声聞も全て含まれる。この道理に従って菩提心を發して縁因仏性を起せば、この衆生は成仏する。しかし道理では全ての三乗が会三歸一されても、この道理を聞かず信ぜざる衆生の縁は菩提心を發せず縁因仏性を生じないが故に不成仏となる。この縁が五千の増上慢であり決定声聞であると、吉蔵は考える。

#### 四、因縁の三乗一乗と諍論

所で「実相の一法より一切の教を出だす。謂く用無量なり」と云う実相の一法より出生した用の一切の教は、方便仮名であり、勿論この中に一乗三乗も含まれる。まず三乗・一乗或は八万四千の法門全てが実相の用である文は、

人について体用を明かすとは、下の偈に云わく、諸法実相の中には我に非ず無我に非ずと。此れは人に就いて実相の体を明かす。諸仏或るときには我と説き、或るときには無我と説く。

我・無我の体用既に爾り。常・無常・真俗・三乗・一乗・五部・十八部・涅槃經の三十余の諍論、乃至五百部、八万四千の法門、皆な是れ実相の用なり。（中觀論疏、卷第八末、大正蔵

四二卷、一二四頁上）  
と、非三非一が実相の体であり、三乗一乗等は全て実相の用である。この実相の用は方便でもある。

問う、何が故ぞ前に我無我的方便を明すや。答う、正しく声聞の我を以て方便と爲し、無我を眞実と爲すに對するなり。毘曇の十六諦の空無私の理の如し。又成実者の云うが如し、世諦には我あり、第一義諦には我なしと。是の故に今声聞の若しくは我・無我は、菩薩に望めて皆な是れ方便なりと明かす。所以に初めに命じて我無我的方便を弁ずるなり。然も我・無我既に是れ方便なり。常無常等例するに然り。故に昔し無常と説く。既に是れ方便なり。今常樂と説くも亦た是れ方便なり。是の如き三乗一乗、万義皆な類すべし。（中觀論疏、卷第八末、大正蔵四二卷、一二六頁上）

即ち我無我や常無常或は三乗一乗万義皆な、実相の用は、全て方便である。しかもこの方便は仮名相である。

又理に拠って明さば、道門は未だ曾て三一にあらず。三と説き一と説くは皆是れ方便なり。即ち是れ無名相中に強いて名相をもつて説く。（法華義疏、卷第六、大正蔵三四卷、五三八頁下）  
或は、

問う、此の大乗も亦是れ方便なることを得るや不や。答う、道に望むれば未だ曾って大小にあらず。大小の縁に赴くが故に無名相の中に名相を仮って説く。故に大小俱に是れ方便なり。但

大小俱に是れ方便なるのみに非ず、亦三一も俱に是れ方便なり。但し今は大小相對して、小乗は是れ未了なるが故に是れ方便なり。大乘は已了なれば稱して真実となすなり。（法華義疏、

卷第四、大正藏三四卷、五〇一頁中）

と、理（実相の体）は三乗とか一乗とかと名言で示す事の出来な無名相のものである。それをあえて三乗一乗と説くのは、方便であり、仮名相である。仮名相を敢えて説くのは、「大小の縁に赴くが故に」とあるごとく、衆生の機縁の爲である。先に示したごとく、

但し衆生は薄福鈍根にして一道を受くるに堪えず。是の故に一仏乘に於て方便して三と説く。謂く枝末法輪なり。（法華義疏、

卷第三、大正藏三四卷、四九四頁中）

と、枝末法輪の三乗方便門を説くのも、三乗の衆生の縁に依じて説いたまでである。

所で吉藏の云う方便の意味の一つには、因縁の三乗・一乗を云い、実相より出生した三乗一乗を誤って絶対化すること否定する。即ち、

次に無方便の四句を挙げて之を對顯せん。一には昔の縁は三を執じて仏の一を覆い、三を説くことは一を開かんが爲なることを知らず。二には今の縁は一を執じて仏の三を覆い、一なりと雖も三を失せずということを知らず。三には自性の三を執じて仏の因縁の一の三を覆う。四には自性の一を執じて仏の因縁の

吉藏の成仏不成仏觀（五）（末光）

三の一を覆う。此の如く昔の執は皆是れ方便なし。故に無方便も亦今昔に通ずるなり。（法華義疏、卷第三、大正藏三四卷、四八三頁中）

と、無方便の四句を説く。どの四句も一乗や三乗を固執し、出生した一乗或は三乗を絶対化する内容であり、この絶対化を否定する。「自性の三を執じて仏の因縁の一の三を覆う」或は「自性の一を執じて仏の因縁の三の一を覆う」とあるごとく、自性の三乗、自性の一乗を思い執することが無方便である。これに對し、「因縁の一の三」或は「因縁の三の一」とあるごとく、因縁の三乗一乗が吉藏の云う方便である。

このことは三乗一乗のみならず他の場合も同じである。「実相の一法より一切の教を出だす。謂く用無量なり」と云う一切の教の出生の無量の用は、方便であり因縁相即する。吉藏の因縁相即の件<sup>(18)</sup>に關しては、既に先学によつて詳しく論じられているので、ここでは一例のみ示す。

又如來は、常に二諦に依つて法を説きたもう。但し二諦は是れ因縁の空・有なり。而るに外人は、有を聞いては有の解を作して自性の有を成ず、無を聞いては無の解を作して自性の無を成ず。則ち二諦を障う。既に二諦を障うれば則ち二智生せず。便ち三世の諸仏菩薩なきになんぬ。斯の病既に深し。故に須らく重ねて破すべし。（中觀論疏、卷第七末、大正藏四二卷、一一一頁中）

既に有と空の二諦は因縁の空有であり、自性の有、自性の空を否定する事が、その内容である。有と空の二諦を、三乗と一乗の二諦に置き換えればよく、吉蔵は自性の三乗、自性の一乗を否定し、因縁の三乗・一乗を主張するのである。因縁の三乗・一乗とは、

昔三異今一此三有一外。今一異昔三此一在三外。故一非三一、三非三一。如レ此一三皆是執見。今破此病故、云於一仏乗分別説三、故三是一三。汝等所行是菩薩道、故一是三。以三是一三、三豈異一。一是三一、一豈異三。故名三一因縁之義。〔略〕（法華玄論、卷第五、大正蔵三四卷、三九七頁上―中）

と、「於一仏乗分別説三」の三乗は、一仏乗を前提として説かれた三乗である。又「汝等所行、是菩薩道」の一乗の菩薩道は、声聞の所行の三乗に関連する一乗である。即ち「三は是れ一が三なるを以て、豈に一に異ならんや。一は是れ三が一なれば、一豈に三に異ならんや」と、三乗と一乗は因縁の三乗一乗であり、自性の三乗一乗を否定するものである。

吉蔵においては、三乗一乗、或は空有に限らず、実相の一法により出生した一切の教は、方便であり、因縁相即するものであり、絶対的なものではない。無名相の実相を、仮名相を以て説く事に関して、

問、若言非因果非虚非実者、斯乃真諦四亡。復何開一乗

妙旨。答、既言非因果非俗非真非縁非観。故釈論解般若云、因是一辺、果是一辺、離是二辺名爲中道。又云、縁是一辺、観是一辺、離是二辺乃名中道。（法華玄論、卷第二、大正蔵三四卷、三八二頁上）

或は、

五には因に非ず果に非ず、故に論の実相を釈する文に云う、因は是れ一辺、果は是れ一辺、此二辺を離れたるを名づけて中道と爲す。縁は是れ一辺、観は是れ一辺、此二辺を離れたるを名づけて中道と爲すと。故に知る実相は未だ曾て因果ならず、亦境智に非ず、而も縁に随い義を遂うて上の四句の不同あり。衆師応に汎く隻文を引いて以て円旨を通ずべからず。（大衆玄論、卷第四、二智義、大正蔵四五卷、五三頁下）

と、大智度論の「因是一辺、果是一辺」のこの文をよく引用する。<sup>(20)</sup> 実相の一法より出生した因や果、或は観や縁等は、実相の一辺であり、一説であって、この実相の一辺一説を絶対化することを否定する吉蔵の考えを良く示す引用文と思われる。吉蔵の考えでは、真実が幾つも存在することは不合理な事であって、真実は一つしかないから真実と言えると云う様である。言教は実相の一面を示すにすぎず、方便であり、仮名相であり、相対的なものと考えている。

しかし実相の一法より出生した相対的な一説を誤解して、これを絶対化する。

故に經に云う、凡そ二あるは皆是れ邪見なりと。故に知る一切の諸師は仏性を知らずして各一辺を執し、是非諍論して仏性を失するなり。(大乘玄論、卷第三、仏性義、大正藏四五卷、三八頁下)

或は

若し本有を執らば則ち始有に非ず、若し始有を執らば則ち本有に非ず。各一文を執つて經意を会通するを得ず。是非諍競して仏の法輪を滅することを作す。(前同、大

正藏四五卷、三九頁中)

即ち、実相の一面を示めす一文一説に固執し、それを絶対の説であると各自が主張するから、諍論が生ずると吉蔵は考える。又各々為人悉檀に對し、

十二部八万法藏、言並相違。或三或一、或無常或常、或仏出二諦外、或二諦内、或三世有或一世有、如大經三十余諍論門。無智之者、各執一意互相是非。現世起諍論増長煩惱、乃至斷善根墮墜惡趣。似僧地獄正擬斯人。欲免斯過者、須用第二悉檀。所以八万法藏及塵沙法門並相違者、此是如来各各為人悉檀、故不相違背。如大經云、以下此衆生非一根性非一善友非一国土是故如来不得一向定説。以此此義觀之、於一切法門、無所違諍不起煩惱免於似僧也。(法華玄論、卷第四、大正藏三四卷、三九一頁下)

吉蔵の成仏不成仏觀(五)(末光)

と、「各一意を執して互いに相い是非ず。現世には諍論を起こして煩惱を増長」する各々の説も、「是の故に如来は一向に定説することを得ず」と云う衆生の機根に従つて定説しないと云う觀點に立てば、諍論も治まると説く。法華義疏中

諍競する所ある(べからず)とは、誠めて偏に所執あるべからざらしむ。求那跋摩の遺文の偈に云く、諸論各々異端あれども、修行すれば理は無二なり。偏執して是非あり、達する者には違諍なしと。(卷第十、大正藏三四卷、五九七頁下)

と、求那跋摩(三七七―四三一)の遺文の偈の諍論に関する文も引用している。<sup>(21)</sup>又

今明す、大乘は縁の所宜に適うて定執あることなし。若し定執あらば即ち諍論を成じて闡提に趣向せん。(法華義疏、卷第二、大正藏三四卷、四七四頁下)

と、実相より出生した方便の一説を定執すれば、諍論となり、一闡提になると云う。一闡提とは、最後まで方便の三乗を固執し絶対化する五千の増上慢や決定声聞であると、吉蔵は主張するのである。

## 結 言

出生とは、実相の体より用を起す事、又收入とは用を摂してもとの実相の体に帰する事である。しかも「実相の一法より一切の教を出だす。謂く用無量なり」と云うごとく、八

万の法蔵、恒沙の法門も全て収入と出生の中に含まれる、と吉蔵は考える。

この為法華の三乘一乗も、収入と出生で解釈される。即ち「於一仏乘分別說三」が出生に相当し、「会三歸一」が収入に相当する。又三種法輪説の根本枝末法輪は出生を、法華以後の撰末歸本法輪は収入を示すものである。

そうであるならば、実相の体より出生した三乗は、全てもとの実相の一乗の体に収入されることになる。即ち全ての乗は収入されるから、一切皆成仏となり、吉蔵が五千の増上慢等不成仏説を云うのは不合理ではないかと云う事である<sup>(22)</sup>。

しかし吉蔵は、教と縁とを別なものと考えている。三乗の縁を一乗に導く為に三乗の教を説き、更に三乗の教が一乗に収入される事を示して、三乗の縁が一仏乘に収入する事を願ったのである。教の収入は道理であり、正因仏性に相応する。

縁の収入は現実問題を論ずるものであり、縁因仏性に相応する。五千の増上慢と決実声聞は、正因仏性があり道理上では一乗に収入され、成仏可能である。しかし法華の収入の教を不聞不信の故に、縁因仏性を発せず不成仏となる。常不輕所対の増上慢は、法華の収入の教を初謗後信し、千劫無間地獄に墮ちた後、会三歸一の道理に従うが故に成仏する。又退菩提心の声聞と応化の声聞は、勿論最初より教の収入に従う縁であるから、成仏する。吉蔵が撰末歸本法輪に対し、得失門

というのはこの為である。

又実相の一法より出生した用の一切の教えは、方便仮名である。方便であるが故に、因縁・相対的なものである。三乗一乗も因縁の三乗一乗であって、自性の三乗や自性の一乗ではない。しかし衆生の縁は、因縁の三乗一乗であり実相の一面を示めす三乗一乗であるものを、誤って絶対化する。即ち「各一辺を執し、是非諍論」する。最後まで、三乗の教えの一辺を執し続けるのが、五千の増上慢と決定声聞であると、吉蔵は考える。

次回、論述出来なかった方便等の問題について更に論究したいと考えている。

#### 註

- (1) 駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十五号、昭和六十二年三月、
- (2) 駒沢大学仏教学部論集、第十八号、昭和六十二年十月
- (3) 駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十六号、昭和六十三年三月、
- (4) 駒沢大学仏教学部論集、第十九号、昭和六十三年十月、
- (5) 「又如大地有<sub>二</sub>四種宝蔵<sub>一</sub>」(大正蔵十二卷、二一八頁中)、
- (6) 出三蔵記集、卷第十一、大正蔵五五卷、七七頁下、
- (7) 「無量義者、從<sub>二</sub>一法<sub>一</sub>生、其一法者、即無相也。如是無相、無<sub>二</sub>相不相<sub>一</sub>不<sub>二</sub>相無相<sub>一</sub>。名為<sub>二</sub>実相<sub>一</sub>」(大正蔵九卷、三八五頁下)、又註4論文三二六頁参照、

- (8) 「如<sub>レ</sub>是一味随<sub>二</sub>其流処<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>種々異<sub>一</sub>」(卷第八、如来性品第十二、大正藏十二卷、六四九頁中)
- (9) 卷第一、大正藏九卷、八頁上、
- (10) 法華義疏、卷第二、大正藏三四卷、四六七頁下、
- (11) 法華義疏、卷第二、大正藏三四卷、四六八頁上
- (12) 註4論文、三二三頁、又註3論文参照の事、
- (13) 法華玄論、卷第七、大正藏三四卷、四二〇頁中、
- (14) 同右頁
- (15) 法華遊意、大正藏三四卷、六三四頁下、
- (16) 註1論文、二八九頁等参照、
- (17) 註3論文、「三、人天の成仏」(二三五―二三八頁)参照
- (18) 平井俊榮著『中国般若思想史研究』「第一節、無得正觀の根本基調」(四〇六―四一六頁)、春秋社、
- (19) 卷第三、藥草喻品第五、大正藏九卷、二〇頁中
- (20) 大智度論、卷第四十三、集散品(大正藏二五卷、三七〇頁上―中)の趣意文中觀論疏(卷第三、大正藏四二卷、五〇頁下)や宝窟(卷中之本、大正藏三七卷、三三頁中)等にも引用がみられる。
- (21) 梁高僧伝、卷第三、求那跋摩七に「諸論各異端、修行理無二。偏執有<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>、達者無<sub>二</sub>違諍<sub>一</sub>」(大正藏五〇卷、三四二頁上)とある。
- (22) 奥野光賢「吉藏の法華論の依用をめぐる」(駒沢大学仏教学部論集第十八号、昭和六十二年十月、三七六頁下―三七八頁上)参照